



ワシントンの顔

和田 光弘 (西洋史学)

アメリカ合衆国初代大統領ワシントンといえば、皆さんはどのような顔を思い浮かべるでしょうか。おそらく彼の最も有名な肖像画は、現在の1ドル札に印刷されたもので、画家スチュアートが18世紀末に物した作品です。生前から神格化されたワシントンの肖像画や彫像は、後代の作も含めて当然ながら数多く残されており、描かれた時点の年齢や描いた画家によってじつにさまざまなバリエーションがあります。その主要なものは、彼の生誕200周年を祝って1932年に発行された12枚の記念切手のセットに見ることができます(図の上段)。左から4番目の2セント切手が、1ドル札のワシントンです。左から2番目の1セント切手は、フランス人彫刻家ウッドが1780年代に作った胸像を描いたものですが(左下の拡大図)、この胸像のワシントンの顔と、図の中央のメダルの顔がよく似ていることにお気づきでしょうか。この記念メダルはアメリカ史上、最も有名なメダルの1つで、同じく1780年代にアメリカ政府がパリの造幣局に製作を依頼し、新国家の威信を高めるべく、当時のヨーロッパ諸国の例に倣って各国の君主などに送ったものです。このメダルの顔を描いたフランス人デュヴィヴィエは、ウッド作の胸像を参考にしたとされていますので、当然似ているわけです。そしてこのメダルを基にしたとされるワシントンの肖像が、ワシントンの逝去を悼んで1800年頃に作られた鉄製カメオ(図の右下)に見られます。このカメオはベルリン鋳物と呼ばれるきわめて精巧な作りで、当該の技術に秀でたドイツで複数個製作され、アメリカに運ばれてワシントンの親族も手にしました。図の個体は、独立宣言にも署名した将軍フロイドが所有していた逸品で、5代下った子孫が手放し、幸運にも筆者が入手しました。このようにジュエリーやメダル、コイン、切手などの小さなモノも、時には文献史料以上に雄弁に、大きな国の歴史を物語ってくれるのです。



【すべて筆者蔵・撮影。中央のメダルは複製】

学生たちの研究生活—File4

「王與馬共天下」—中国史の研究と活力—

研究室名：東洋史学研究室

東洋史学はアジア全域の歴史について研究する学問です。私たち院生の活動は授業で知識を得るだけでなく、それを活用していくことが中心となります。よって自ら課題を設定し、解くという主体的な取り組みが重要になります。私の対象とする中国史の場合、多く文献史料を用いるので主に研究室や図書館で活動し、また視野を広げるために他大学の研究会に参加することもあります。

私の研究は魏晋南北朝時代(三～六世紀)の西晋政治史を中心にを行っています。史料は主に唐修の『晋書』を用います。中国史



六朝・石頭城遺址(南京市)

といえば始皇帝以来二千年余も続いた皇帝がまずイメージされるでしょうか。君臨する絶対的な皇帝とその下で働く官僚たち。しかしそういう時代ばかりではありませんでした。

例えば司馬睿が建てた東晋は貴族（王氏）無くしては成り立たず、その有様は「王馬と天下を共にす」（『晋書』王敦伝）と評されました。つまり臣下の“王”氏が皇帝の司“馬”氏と一緒に天下を治めていたというのです。したがって官僚も単なる手足ではありませんでした。王朝が官僚を選抜することを「選挙」といい、魏の曹丕のときには「九品中正法（九品官人法）」が制定されました。これは地域に詳しい地元の有力者に人材を推薦させるものです。このことは地方の名族の協力が不可欠なことを示し、このため貴族の時代とも言われます。

とはいえ皇帝の側も種々のことを試みていました。南朝宋では貴族以外を採用して権力強化に臨んでいます。私はこうした試みがそれ以前にあったのではないかという問題意識から現在西晋を分析しています。このように史料は生きた姿を、時代を様々に伝えてくれます。歴史という学問は多岐亡羊として、かつ地道な作業の連続ですが、その中にも人々の生き活きとした様子を垣間見ることができるのです。

[尾関 圭信（博士後期3年（執筆時））]

学生たちの研究生生活—File5

画家の眼差しを追いかけて—ボナールの風景画研究

研究室名：美学美術史学研究室

国内各地あるいは世界各地に散らばる作品を直接見に行くことは、美術史学研究の醍醐味の一つです。それに加えて、研究対象によっては、しばしば、その作品が描かれた現地に足を運ぶことも新たな発見の端緒になるでしょう（出不精、旅嫌いにはちょっとキビしい学問ですね）。

私は、マティスやピカソとほぼ同時代にフランスで活躍した、ピエール・ボナール(1867-1947)という画家の作品のうち、とりわけ、風景画を主に研究してきました。この画家の制作の特徴は、実際の風景からインスピレーションを得ていながら、それを、一旦、独特の方法でデッサンし、その下絵を基にして油彩画を描いているということです。

修士論文では、この下絵素描と完成した作品を細かく比較するという作業を行いました。すると、ときには複数のデッサンを合成することで、風景をそのまま写しとるのではなく、その感動をより強く伝えられるよう、色彩や構図に工夫を凝らしていたことが分かってきました。また、実際に画家が描いた土地にも足を運び、ボナールが、いかに慣れ親しんだ場所と繰り返し向き合うことにこだわっていたのか、実感することができました。

現在は、学芸員として働きながら、業務のなかで江戸絵画から現代アートまでを扱う毎日ですが、就職先の美術館では、画家による下絵や素描も、コレクションの柱の一つとなっています。この環境も、自分自身の研究に活かせるよう、収蔵庫や展示室で、作品に直接触れる機会をなるべく持つように意識しています。

[吉田 映子（博士後期3年（執筆時））]



ボナールが晩年に通い、しばしば描いた散歩道

お花見

大学も新年度がはじまりました。文学部の校舎裏手の桜の木は、毎年この季節に綺麗な花をつけてくれて、学生や教員の恰好のお花見スポットとなっております。写真は今号編集時（4月1日現在）、満開の桜です。入学式の頃まで保ってくれるといいのですが…

(K記)



最近の文学部